

桃介-木曾から夢を乗せて-

017 岐阜県立加茂高等学校 美術部

『俺はこの木曾川で電力を作り、日本の未来を変えるのだ。』

福沢桃介 45 歳、人生最大の冒険が始まった。

長野県読書(よみかき)村。最近汽車が通ったこの街に、一人の男が降り立った。

名古屋電灯の常務であった桃介。彼の電力事業の集大成として、木曾川流域に発電所を建設し、電気を名古屋、大阪で送り届けることを決めた。その旗を揚げたのが、ここ長野、木曾である。

「あやつは、何がしてえの？」

人々は彼の動きに懐疑的であったが、彼にはお構いなしだ。彼は上流から数多くの発電所を作り上げ、木曾川は人々の生活を支える存在となった。

『安定した電力を使える日本が、俺の夢見た姿だ』

やがて「電力王」と呼ばれた彼は、夢を見た読書の地、木曾川に架かる橋に「桃之橋」と名付けたのであった。

100 年後、中央線の姿は、汽車から電車へ移り変わった。もしかしたら、この電車も彼の想いを乗せて走っているのかもしれない。



旅する人
江戸川乱歩賞
2026 出展作品